

北 どりくろあ

第97号 2024年4月1日（毎月1日発行）

きすき
木次線ストロール⑦

かめだけ
亀嵩駅

「和泉式部の墓？」

『砂の器』の舞台の地

今日は曇り空、風が強くて冷たい。3月18日月曜日、朝の8時45分に車で庄原の自宅を出た。田は緑の草に覆われ、シロツメグザやレンゲが咲いている。

10時過ぎに出雲横田駅に到着。始発の列車が7便増えて、木次や宍道方面が1日10便になる。乗り

場が違うので注意が必要。始発便は駅舎のある2番ホーム、備後落合駅始発の3便は線路を渡った1番ホームになる。

駅前の駐車場に車を停めて、10時34分発の木次行きに乗車。今回の列車は、木次線のブランドカラーのきすき色（山吹色）と棚田

の緑色のツートンカラー。車体の色が違う列車が6種類あるので、どんな列車がホームに入ってくるのか楽しみだ。

わたし以外にも地元の方が一人乗車。車内には旅行客らしい先客が3人。時間調節か、8分ぐらい停車していた。八川―出雲横田間は平地を走るイメージだが、亀嵩までの車窓は川沿いの渓谷の景観が多くなる。そして、長いトンネルを通過した先に亀嵩駅はある。乗車時間は12分ほど。料金は210円で、今までの経験で、一駅区

間が200円を超えると距離が長くなり、帰りの歩きが大変になる。出雲神話にちなんだ駅の愛称は「少彦名命（すくなひこなのみこと）」。駅の東北にある湯野神社には、大国主命（おおくにぬしのみこと）や少彦名命が祀られている。この二柱の神様は協力して国造りを行い、人々のために病氣治療の法、動物の災いを除く呪（まじな）いの法などを定めたと伝承されている。「スクナ」という言葉には「小さな神」という説がある。

駅舎は小さくて、その半分が「扇屋」という手打ち蕎麦の店舗になっているが、残念ながら臨時休業を告示する貼り紙が扉に掲示されていた。駅前には観光用の警察官の顔ハメ看板。亀嵩は、松本清張の長編推理小説「砂の器」の舞台になった場所で、野村芳太郎監督で映画化され、昭和49（1974）年に公開された。緒方拳が扮する地元の警察官が、神社の拝殿の下に潜んでいるハンセン病の父親と息子の巡礼者を見つけるシーンが、前出の湯野神社で撮影された。

駅前の国道432号線を少し左に行くといくつか、不思議なことにあり和泉式部の墓」という看板が立っている。案内板の指示に従って進むと、木次線の線路を超えた山裾に、「傳和泉式部墓」（写真下）がある。解説板によると、右の笠



駅の近くにある「傳和泉式部の墓」

石のある方が和泉式部の墓で、左が娘の小式部内侍の墓（碑）。和泉式部の夫が地方官として九州に赴任、夫の身を案じて九州に行く途中、この地で病を得て没したという。

実は、こうした和泉式部の墓は東北から九州まで全国各地に伝承されている。この理由を、民俗学者の柳田國男は「式部の伝説を語り物にして歩く京都誓願寺に所属する女性たちが、中世に諸国をくまなくめぐったからである」。

史実であるかどうかは別として、恋多き女性としてたくさん恋歌を残した歌人の墓が、山陰の山間の地

にあるというロマンが楽しい。「高柴のまへの簾をかきあげて大内ながむれば琴の音ぞする」、和泉式部が詠んだと伝えられる和歌が石碑に刻まれている。

国道432号を、今度は反対方向の、安来方面（東）に向かって歩いた。亀嵩の集落まで、約3キロの距離がある。幸い天気は回復して、雲の切れ間から春の陽光が差している。

途中、亀嵩川に流れ込んでいる沢を見つけて、上流への沢沿いの道を少し登ってみた。「木次横田線」で、横田加食まで通っている。沢に降りて流れの中の石を確認すると、拳大

の金屎（鉄滓）がゴロゴロ。たたら製鉄が盛んだった証拠である。国道に戻って歩くと、田園地帯の中に鉄穴（かんな）残丘と思える小高い丘がいくつもある。斜面が崩れた場所があったので近くで確認すると、花崗岩の砂が堆積している。周辺を巡ると、細長い池がある。花崗岩を粉碎して水に流し、比重を利用して砂鉄を採取するのが鉄穴流し、その残土を積み上げたのが鉄穴残丘。たたら製鉄の当時の痕跡が、普通の風景の中で体感できたことに驚いた。

国道から左に分かれた旧道に入ると、亀嵩の集落が続いている。古い看板や店構えを眺めていると、宿場町として栄えた時代の光景が浮かんでくるようだ。村田英治さんの『『砂の器』と木次線』に書かれている、脚本家の橋本忍や山田洋次が泊ったという村上旅館も確認することができた。

されている古社である。ご神木として樹齢450年の大ケヤキが有名だが、令和元年に伐採されて切り株しか残っていない。しかし、杉の巨木群が神社を守護するように聳えている。

参道には三の鳥居まであって、四対の狛犬が歓迎してくれる。社殿の近くには屋根付きの土俵がある。子供の頃、近所のお寺の相撲大会に参加したときのことを思い出した。立派なしめ縄の拜殿（写真下）に参詣、能登半島地震の被災者の方々の健康を祈願した。

国道に戻って先に進むと、道の駅「酒蔵奥出雲交流館」がある。その前の道を右折して山の方に登って行くと、「亀嵩温泉・玉峰（たまみね）山荘」がある。以前に何度か車で来たことがあって、日帰り入浴が700円。少し遅い昼食と、歩き疲れた体を温泉で癒すことができた。

休憩室で、甲子園の選抜高校野球を放映している。北信越代表の星稜高校（石川県）と21世紀枠の田辺高校（和歌山県）の対戦。つい、被災地の星稜高校を応援……、いやいや、どちらも頑張れ！

玉峰山荘を出たのが夕方の4時過ぎ。道の駅でコーヒータム、のんびりし過ぎたようだ。途中の農免道路を利用したのでバス便もなく、山越えの道を横田まで延々と歩く。自分にも「頑張れ！」



鉄穴残丘の崩れた斜面の花崗岩の砂



国道に戻ってさらに進むと、湯野神社の前に出る。参道の入り口には「砂の器」の記念碑。こうして書くとは映画のロケ地としての観光名所のような印象だが、1300年以上の歴史があるといわれ、「出雲国風土記」に「葉湯の守護神」として記載

寄稿エッセイ

小澤征爾さんの指揮で合唱

佐藤勉

世界的に有名な指揮者である小澤征爾さんが、2月6日88歳で亡くなられたニュースや報道に接し、多くの方が追悼文を寄せられています。19年前の2005年（平成17年）、小澤さんの指揮でフォーレ作曲の「レクイエム」を450名の合唱団の中で歌うことが出来た事を改めて思い出します。

小澤さんが、音楽の世界で素晴らしい活躍をされ、その功績を思い起こしてみます。2002年のウィーン楽友協会でのニューイヤークンサートの名演。そして、ポストン交響楽団音楽監督を29年間も勤められ、バーンスタインに可愛がられて、小澤ファンは世界各国に居られます。「旧サイトウキネンフェスティバル松本」は、若手の育成を目的に活動され、演奏されたCDの中に庄原出身の山城宏樹さんがトランペット奏者として名前が残されています。「ボクの音楽武者修行」の著書に、若くしてブザンソン指揮者コンク

ルで一位になられた時のことや、船にスクーターを乗せてヨーロッパの音楽修行をされた話など、痛快な行動力が書かれていて、私の若い頃の心に響きました。2001年3月に

定年退職した私は、新しいことに挑戦してみようと思い、マーラー作曲交響曲第2番「復活」の合唱へ参加し、オーケストラ演奏と壮大な合唱の響きに心地良い体験をしました。その後も広島大学教育学部の定期演奏会の合唱曲で、カンタータ「カルミナブラーナ」「土の歌」、最近ではモーツァルト作曲「戴冠ミサ曲」、オペラの合唱曲など大規模な音楽や歌を体験しています。



2005年10月、被爆60年を迎えた広島で開かれたコンサートのフィナーレの合唱で、観客に向き指揮をする小澤さん（中国新聞より転載）

2005年5月、小澤征爾さんの指揮で「平和メッセージ合唱団員募集」の記事を見て、絶好のチャンスだと考え、広島でのオーディションを経て一緒に活動することになりました。全国から600名が応募され、250名が合格、月2回の練習が6ヶ月続きました。練習の最終日に、女学院大

学の近くに住んで居られた井上一清夫妻と面会し、娘さんでチェリストの川口あやさんの演奏されたCDを記念に戴きました。

10月21日、広島県立総合体育館の特設ステージには、小澤征爾音楽塾のメンバーと中国音楽塾のメンバーを合わせて50名のオーケストラでした。合唱も中国音楽塾の20名と東京成城合唱団他200名、それに平和メッセージ合唱団250名を合わせた編成になりました。フランスの作曲家フォーレの「レクイエム」（鎮魂）全曲を、ラテン語で合唱、深い感銘を受けました。

気さくでやさしい小澤さんの印象ですが、全身での情熱あふれる指揮と豊かで繊細な演奏により、多くの人へ感動をもたらされました。「世界へおくるメッセージ」とあの時の「レクイエム」は、小澤征爾さんへの「祈り」だと思っています。



文学探訪

人生探訪の徒、倉田百三の流転② 実篤の「新しき村」支援と拡がる人脈

音谷健郎

大正7年7月、倉田百三は脊椎カリエス等に加え関節炎を併発し、九州大学付属病院で診療を受けるため九州・福岡に転地療養をします。滞在は1年5ヶ月と長くはないのですが、新しい多くの交友を生みました。一つの転機にもなっています。

九州・宮崎に創設された「新しき村」を支援したことで武者小路実篤と親

しさを増し、「白樺派」の作家長興善郎たちを中心に交友がひろがります。さらに、福岡在住の歌人柳原白蓮、社会活動家の宮崎龍介たちとも親しくなつたのです。

武者小路実篤との関係から始めると、大正7年の創設ほどない「新しき村」の福岡駐在代表になつていきます。これに前後して、長興善郎、千



武者小路実篤 (昭和初年ころ)



志賀直哉 (大正7年ころ)



長興善郎 (昭和25年ころ)



柳原白蓮 (大正8年ころ)

家元麿、志賀直哉、有島武郎とも交友が始まっています。

「新しき村」は、この時代にぜひ注目されたので紹介しておきます。

武者小路実篤が同志を募つて大正7年8月に九州・宮崎の日向に作った理想の農村共同体です。開墾地を買い取つて有志で働き、私有財産は無く、「(1週間のうち) 一日は休日、一日6時間労働」を基本に、残りの時間は生き甲斐の時間として享受するという旗印。実篤が考えに考えたこの理想の暮らし方を指南するのが、「新しき村」での仕事に着手する直前に書いた「新しき村に就いての対話」という小論文です。実篤の熱気が伝わってくるからです。

この小論は、対話形式になつていて質問者「A」に対して、応えるのは実篤を思わす「先生」です。「新しき村」をあらゆる方面から考えようとしています。

「A どんなんことを考えていらつしやるのですか」。これに対して「先生」の長い答えを、私の主観で要約すると、「一言で云えば、この世がどうなれば一番合理的であるか、世の中がそうなるにはどうしたらいいかを考えている」と前置きして次のような労働観を被露しています。

人々は強いられずに、名誉のために、人類のために労働をすると云う時代が来なければならぬ▽なるべく器械を応用し、労働を健康に楽しむように骨折し、利欲や生活難の伴わない労働をするようにしたら、今の労働とはまるで違うものになる▽一生の間に一人の働く義務量は定められていて、その他は自由気ままに自分のしたいことが出来、そこに初めて自由があり、競争があつてもいい▽金持ちが貧乏人と同等になることは、金持ちが貧乏人になることではない。金持ちも貧乏人も同じく人間として人間らしく生きると云うことにすぎない、と。

一つのことを、徹底的に考えるのは、若き百三と似ているが、百三が哲学的に考えるのに対して、実篤は平易な日常感覚で考えています。「労働」についてのこれらの考えは当時、毛沢東が関心を寄せ、その思想に影響したと云われています。

昭和になつて、「新しき村」の一部が水力発電のダム湖に呑み込まれることになり、埼玉県に第2の「東の新しき村」を開きます。戦後は養鶏が成功し最多時は村民60人になつたこともありすが、高齢化などで数人に減つていきました。

◆武者小路実篤と「新しき村」◆

1918(大正7)年 34歳

8月「新しき村」の仕事始める

感想集『新しき村の生活』を出版

11月同志19人と宮崎・日向で村建設に着手

1920(同9)年 3月 感想集『新しき村の労働』を出版

4月 短編「土地」を発表

1924(同13)年 3月 感想評論集『新しき村の生長』を出版

4月 同『新しく村の今後』を出版

1925(同14)年 2月 次女妙子、「新しき村」にて生まれる

1926(同15)年 1月 村を離れ、奈良市に転居

1928(昭和3)年 2月 東京・有楽町に「東京新しき村会場」を作り美術展、狂言、講演、座談会などを毎月行う

1938(同13)年 田三反が水力発電所建設で水没予定地となる

1939(同14)年 9月 埼玉県入間郡毛呂山町に東の「新しき村」創設

1941(同16)年 5月 新しき村機関誌「馬鈴薯」創設

1948(同23)年 3月 「新しき村」は財団法人となる

1953(同28)年 11月 新しき村誕生35周年祭を東の「新しき村」で行う

百三は、九州療養時代に炭鋌王と結婚していた柳原白蓮と短歌を通して親しくなっています。中国革命の協力者、宮崎滔天の息子、宮崎龍介が百三の借家に入入りし、白蓮と駆け落ちのきっかけを作ることにもなったのです。

白蓮については、突然の訪問を受け百三と一緒に逗留していた晴子が驚いた様子などを後年、晴子を身近に知った作家青木笙子が次のように書いています。

「倉田は自宅でレコードコンサートを開き、その収入を『村』に寄付するなど何かと武者小路に協力し、また武者小路のほうも『福岡支部』によく立ち寄った。倉田の家は、サロンのような趣きになった。文化関係の有名人がしばしば立ち寄ることになった。柳原白蓮、児島善三郎などである」(青木『築地人形』より)

同じ頃の大正13年には、実篤や志賀直哉、千家元麿、長興善郎ら白樺派系の雑誌「不二」を創刊しています。その長興に、百三が大正9年と15年に出した手紙が田園文化センターの

倉田百三文学館に保存されているので、紹介します。長興は、百三より3歳年上で、「青銅の基督」の作品が有名。手紙からは、百三の細やかな心遣いや近況が分かります。

「今、頼朝の序幕を読んできました。近頃これ程感心した作はありません。私は燃えるやうな創作欲をささられました」(大正9年)

「御手紙を拝見して驚きました。そんなに色々病気になるのは本当に難儀でせう。…実は僕は不眠の外に、妙な障りが出来て、視覚に異常がありません。」

「私は毎日仕事と読書と祈祷と音楽とで暮らしてゐます。風邪を恐れるので外出することは殆んどありません。…生活経験が乏しくて仕事の材料がなくなりはいまいかと、不安な気もしますが、然し、心を貧しくして、深く物を考へ、よく人生を見れば私の周囲にも無限の材料があるやうな気もします。私は今は楽しみは、仕事の外にはなくなりました」(大正9年1月)

「武者小路さんが上京の途中を立ち寄る由、宿は私の方のお寺の座敷がありますから心配ありません。私も此の頃は元気です。皆集まりませう」(消印不明)

ずっと療養中ながら百三が、生き生きとしていた時代にタイムスリップした気になりました。

ハロー注意報④

——進駐軍がいた町のはなし

閣下と大臣

松岡初枝

昭和二十五年六月、朝鮮戦争が勃発した。当時父は所沢にあったアメリカ資本のビクターオートという会社に勤めていた。この会社は主に復員した人達を採用していたが、アメリカ式の福利厚生が厚かった。会社



Kさん宅の苺畑の前で、嬉しそうなお私（作者、左端）と友達

の主な仕事は、朝鮮戦争の戦場へ送るアメリカ軍の中古トラックやバスなどの修理だったが、戦況が激しくなると、毎日のように残業する忙しさで、給料も増えていった。まさに朝鮮特需である。この頃ジョンソン

基地から飛び発つ飛行機の数が大巾に増え、朝から晩までゴーゴーと爆音をたてて飛んでいた。昭和二十八年七月、なんとか休戦になったが、ポロポロだった日本の経済は大きく伸びていった。

ちようどその頃祖母の美容室では、手に職をつけたおネエさん達が何人も入店して来て、店は常に三、四人の見習いさんがいて、その中のひとりに元陸軍少将だった人の娘もいた。離婚したばかりの美しい人で、みつ子さんと言った。

母など「あんな美人を離縁したなんて！」と言っていた。元夫は別の人に心が移ってしまったらしい。父であるKさんは「手に職をつけたいというので、どうか宜しくお願ひします」と頭を下げた。「まあ閣下、頭をお上げください」、祖母も母も恐縮してしまっただが、それより祖父や父が「あんな偉い人のお嬢さんがネエ……」と驚いていた。みつさんも独り立ちして、男に頼らない人生を再出発するんだという固い決意で美容師修行に入店して来たのだ。

戦後間も無い頃、陸軍士官学校があった関係で、人間川駅の向こう側の広い土地に「軍人部落」と呼ばれる場所ができた。元将官クラスの数名の人に、国が土地を買い取り恩給がわりに分け与えられた。E中将、YやO少将などの元高位の軍人は、三百坪程の土地に家を建てて住むようになり、その中のひとりがK少将だった。Kさんは小柄ながら、閣下というにふさわしい立派な人格者で、子供の目から見ても柔和な優しい人だった。

みつさんが入店した次の初夏、Kのおじちゃんが自転車で家にやって来た。「はつえちゃん、次の日曜日にもお父さんや弟さん達と苺摘みに

いらっしやい」、「おじちゃんのお庭で苺が摘めるの?」、「赤くておいしいからネ」、「ワイイ! お父ちゃん行きたいよー」。私はお調子者だったので、もう苺のことで頭が一杯になった。

次の日曜日、父と弟達とおじちゃんの家に行った。「閣下、お言葉に甘えまして……」、「サブローさん、閣下は止そうよ、今は米軍機が飛んでるんだよ」、「はあ……」、「それより皆で苺摘もうネ、真っ赤なのを摘んで!」、「はい」。Kのおじちゃんは、それがいいよとか、それはまだ早いよと言いつつながら見守っていた。

「サブローさん、捕虜はどのあたりで……」、「インドネシアでした」、「そう……。支那のあたりからシンガポール、インドネシアかな?」、「蘇州からすぐシンガポールでした」、「牟田口さんの連隊じゃインパール作戦の可能性だってあったのに、よくぞ生還してくれたね」、「私は近衛工兵連隊でしたので、中に入らず外まわりで助かりました。歩兵は気の毒でした」、「本当に御苦労でした」

Kのおじちゃんは父と話したかったのだ。「お父さんといらっしやい」と言った理由が、戦中の話をしたかったのだった。私は苺に夢中、弟達は

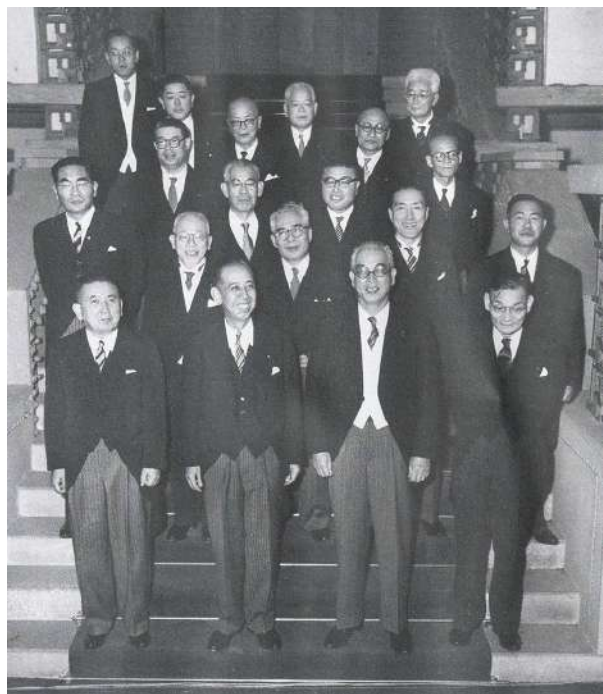


松永東さん

広いお庭を走り廻り、持参の竹カゴが母で一杯になった頃、おぼちゃんがジュースを持って来てくれた。縁側に座ってジュースを飲んでみると「みんなお勉強しつかり、本も沢山読みなさいネ。母はお母さんにジャムにしてもらうといい」、「はい！」。Kのおじちゃんの母畑には何回かおじやましたが、毎年作るジャムは本当においしかった。

私は今でも毎年母ジャムを作る。今売っている大きくて甘いハウスモより、小さめの母の方がジャムには向いている。初夏、露地の母が実る頃、Kのおじちゃんを思い出す。父の「Kさんは閣下と言うにふさわしい人だった…」という言葉と「本を読みなさい」という言葉と共に、甘酸っぱい思い出である。

「本を読みなさい、お勉強しなさい」という言葉で思い出すもうひとりのおじちゃんがいた。昭和三十年〜四



第1次岸内閣（1957年）。
松永東文相は前から2列目・左から2番目

十年代、衆議院議員だった松永東さんで、私が小学生の頃、衆議院議長や文部大臣を歴任した人で、祖父とは仲の良い友人だった。

「こん晩わー、クラちゃん入るよー」裏口から大きな声がすると、台所に居た母が裏口へすつ飛んで行く。「あらまあ先生、おじいちゃん、トウ先生ですよ」、「やあトウちゃん、ようこそ！」、「夕飯時悪いネ、と言ってもいつもこんな時間になるけど…」。

松永のおじちゃんはさつさと茶の間に入って来る。「遊説の帰りだね。クラちゃん、やつと自由と民主が一つになったよ」、「ああ、千軍万馬だね

えトウちゃん！」、「おっ、クラちゃんのおハコが出たね」。二人がそう言っている間に、祖母と母が酒の用意をする。祖父と父と松永のおじちゃんはどうつかり座り、早速政治の話が始まる。

「先生、おウナでも…」、「奥さん、鰻は浦和の名物だよ、奥さんの白菜漬けが一番！」、「あらそうだった、先生は浦和でした」、「今、お車の二人にはおにぎりとお茶用意します」。

母は車で待つ秘書さんと運転手さんにお凌ぎを届ける。家の前に停まる黒塗りの立派な車の中の二人は「待つのも仕事ですからお構い無く」と

言いながらもおにぎりを頬張った。

「秘書さんや運転手さんも大変だ…」

母が茶の間に入ると、大人達、三人の子供、猫までもが松永のおじちゃんを囲む。「まだ飛んでいるんだね、米軍機…」、「気にならなくなつたよ」。この頃はソ連ブルなどが常態化

していた。学校の防音工事も始まつたりして、騒音は慣れっこになっていた。「でも、赤い国、中ソの占領じゃなくて良かった。民主主義じゃなくなる…」、「まったくだ…」。

松永のおじちゃんがいつも言っていた。「これからは女の人も働く時代だよ。国の力が倍になる。この家の二人は働く人だ！」。祖母も母も嬉しそうに笑う。「男が働く女を助けているからだよ」。

祖父と父も笑う。「子供は国の宝、文部行政は大切だ。みんな勉強しつかり、本も読んだよ！」、「はい、おじちゃん」

お酒も進んで楽しい時はあつという間に過ぎてゆく。

松永のおじちゃんと祖父は十歳ほど年齢差があつたが、祖父が若い頃、松永事務所での勉強会に参加してからの縁で、すっかり意気投合した二人は、トウちゃん、クラちゃんと呼び合い、交流が続いていた。いつも突然来て帰ってゆくおじちゃんだったが、私の心にあの力強い声と笑顔は今も残っている。

同時代の二人のおじちゃん、「勉強なさい、読書なさい」。私もまだまだ現役ですよ！

「とうとう、尸解（しかい）の術を
会得したぞ！」

神辺のじいさんがそう言って、レ
ジの前に置かれた丸椅子に腰かけ
た。尸解は中国の道家に伝わる術で、
肉体から靈魂が抜け出して神仙とな
ることである。立派な白い山羊髭を
生やした風貌は、すでに仙人の趣が
ある。

じいさんが取り出したのが、講談
社文芸文庫の中島敦「斗南先生・南
島譚」である。カバーが欠けている
ので百円本の棚に入れておいたのを
購入してもらった。じいさんが買っ
たのはその本だけだが、顧客のよう
な顔でやって来る。

中島敦（あつし）は明治四十二年
の生まれの作家だが、昭和十七年に
持病の喘息が悪化して三十三歳で早
世している。短い生涯に残した作品
は、未完成も含めて二十篇足らず。
「山月記」「李陵」など中国古典の歴
史世界を題材にした作品が有名だが、
パラオなどの南洋諸島を舞台にし
た短編集がある。

「わしは、トン先生の部下だった」
それがじいさんの自慢で、パラオ
の島で暮らしていた頃の話をしてく
れた。トン先生は、中島敦の愛称だっ
たという。

南洋群島が日本の統治下だった期
間がある。第一次世界大戦終了後、
ヴェルサイユ条約によって発足した
国際連合は、ドイツの植民地であつ
た南洋群島を、常任理事国である日
本が委任統治することを認めた。大
正十一年、施政機関である南洋庁が
パラオ諸島のコロールに開設され、
昭和二十年の太平洋戦争敗戦で事実
上消滅した。

南洋桜

現代御伽草子 ⑨1

あきふゆひこ
亜木冬彦

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

中島敦は南洋庁の国語編集書記と

して、昭和十六年六月にコロールに
やって来る。妻子を日本に置いての
単身赴任だった。現地の教科書作成
業務に携わるが、アメーバ赤痢やデ
ング熱にかかったりして体調が悪化。
元々、喘息の転地療養を兼ねての赴任
だったが、雨の多いパラオではかえっ
て症状がひどくなり、翌年三月には
帰国。しかし、体調は回復すること

なく、十一月に短い生涯を終えた。

ハワイの日系移民の子として生ま
れた神辺のじいさんが、南洋庁で働
いていたのは二十歳になるかならな
いかの頃。南洋庁の職員達とそりが
合わずに孤立していた中島敦をサ
ポートして、南洋群島を視察する出
張旅行にも通訳として同行したとい
う。

「寝床に入る前に、タロイモ焼酎を一

杯、ひっかけるんじや」
じいさんが尸解の方法を教えてく
れた。タロイモ焼酎は、ネット通販
で孫に取り寄せてもらっているとい
う。タロイモはサトイモに似て、パ
ラオ諸島では主食として食べられて
いる。日本の焼酎を醸造する技術で
作っているようだ。

「酒を楽しみながら、トン先生の『南
島譚』や『環礁』を読むんじやよ」

そうすると、鮮やかなオールカ
ラーの夢を見る。じいさんの話を聞
きながら、「幸福」という作品を連
想した。中島敦の「南島譚」に収録
されている短編の一つである。

島一番の貧乏人がいた。島の第一
長老の所有する物置小屋の片隅に住
み、最も卑しい召使として仕えてい
る。病に侵され酷使されている哀れ
な男は、椰子蟹（やしがい）カタツ
ツと蚯蚓（みみず）ウラズの祠にタ
ロイモを供えて祈った。この二神は
悪神として名高い。パラオでは、善
神に供物をすることはほとんどな
い。機嫌を取らずとも崇りをしない
ことがわかっていいるからだ。これに
反して、悪神は鄭重に祭られ多くの
食物を供えられる。

ある晩から男は奇妙な夢を見るよ
うになった。自分が富豪の長老に
なつて、贅沢な暮らしをしている。
しかし、翌朝目が醒めると、屋根が
破れた物置小屋の隅に寝ている自分
がいた。

ある日、男は主人の長老に呼び出
された。主人の身体からは脂気が失
せ、出張つた腹も萎んで痩せている。
いやな空咳まで出るようになった。
反対に男はでっぷり肥り、顔色も生
き生きしている。夢の中で、長老と



下男はその立場が入れ替わっていったのである。夢が昼の世界よりも現実であることを確信している男の顔を、哀れな富める主人は羨ましげに眺めた――。

笑っているような死顔だった。百歳を超えての大往生なので、遺族にも暗さはない。お気に入りの椰子の木がデザインされたアロハシャツを着せてもらっていた。例の尸解の術を駆使して、肉体から抜け出して、南国の島にでも遊び

に行っていたのではないか。そして、老いた肉体を捨てて、仙界にとどまる決心をした……。

朝食時になっても姿を見せないじいさんを心配して、家族の人が部屋に行ったら、布団の中で亡くなっていた。枕元には中島敦の文庫本、布団の傍らにはお盆が置かれて、空になったタロイモ焼酎の瓶と湯呑茶碗があった。

「自分が死んだら、この本を渡してくれと言われ取りました」

七十半ばの娘さんから、中島敦の文庫本を手渡された。いやいや、これは棺の中に入れてあげてくださいと言って断ろうとしたが、仙界のじいさんにはもうこの本は必要ないのだということに気づいた。

(尸解の術の伝授かな)

わたしは苦笑を浮かべて、文庫本を喪服の内ポケットに大切にしまった。

その夜、寝酒を用意した。お客さんからももらった地産のどぶろく酒を、湯呑茶碗に注(そそ)ぐ。タロイモ焼酎の代わりである。

口を含むと、濃厚な米の風味が広がった。喉に流し込むと、じんわりと身体の芯が火照ってくる。アルコールにはさして強くないので、こ

れ以上飲むと活字が読めなくなる。

ベッドの上にゴロリと横になり、文庫本を開いた。読み込まれた本は使用感が強く、葉代わりに角が折れているページも多い。「南島譚」から読み始めたが、神辺のじいさんの葬式で気持が昂っているのか、眠気がなかなか訪れてくれない。「南島譚」を読み終えて、どぶろくをもう一杯、飲み干した。「環礁――ミクロネシア巡島記抄――」を読み始めた。

竹を打ち鳴らす音で目が醒めた。いつの間にか寝込んでいたらしい。裸に腰蓑をつけた島民の男たちが、腰をゆすぶりながら踊っている。ハイビスカス(仏桑華)の花輪を頭に被って、額と頬に朱黄色の顔料を塗り、両手に持った竹の棒を打ち鳴らしながら踊っている。

南洋桜と呼ばれている鳳凰木の赤い花が満開で、その木の下で手招きしている人物がいる。神辺のじいさんの面影があるが、年齢はずっと若い。その隣の、髪の毛を七三分けにした眼鏡の人物は、作家の中島敦ではないか。

わたしはふわふわと千鳥足で、南洋桜に向かって歩く――。

まちの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
- ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。

※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日(2月は店内整理で全休)
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第二部 歴史事項を見る

四月三日 聖徳太子十七条憲法

推古十二(六〇四)年

憲法十七条の制定は、内政改革の一つであった。そして、わが国における成文法の第一号となった。古人



も憲法十七条の制定を歴史上の画期的事業であると認識していた。内容は官人に対する道徳的訓戒や服務規程である。

この憲法のなかには「君」と「臣」と「民」の三つの身分があらわれ、「君」は天皇のことをさし、「臣」は官人をさし、「民」は人民のことをさしており、中間の「臣」に対して官人としての心構えと、守るべき規律が説かれている。

これには聖徳太子の抱懐した理想的な国家像がもりこまれていて。それは天皇と官人と人民からなり、天皇が中心に立つて統一された国家である。この国家は政治的に統一されているにとどまらず、仏教を国是として倫理的にも完成された国家であると。

四月六日 大坂夏の陣 元和元(一六一五)年

元和元年三月、京都所司代板倉勝重が、「大坂城は再戦に備えて武器兵糧と浪人を集めている」と、駿府に

報告した。家康は「大坂退城、浪人追放」の二者択一を要求した。これを拒んだため、四月諸大名に大坂出陣を指示した。秀吉死後、豊臣家は実質的な主君と呼べるものを持っていなかった。

四月二十七日開戦となる。合戦は五分五分といっても言いすぎではない。しかし、戦力が比較にならないかった。勝敗は時間が決定する。これが夏の陣の性格であった。五月七日に天守閣が炎上した。この七日が最も激しい戦であった。八日朝、淀殿と秀頼は自害した。

四月九日 小牧・長久手の戦 天正十二(一五八四)年

豊臣秀吉が織田信長の実質的後継者となった。ついに、宿敵家康と全面戦争となった戦である。秀吉に反抗した信雄(のぶかつ)が、亡父信長の盟友家康を頼ったため、戦の名分をえた家康が挙兵に踏みきった。戦況は長久手で勝利を得た家康が局地戦を有利に展開した。だが、秀吉の戦略に屈した信雄が単独講和を結んだことから、家康も応ぜざるを得なくなった。結局、勝敗決せず和睦した。

四月十三日 巖流島の決闘 慶長十七(一六二二)年

長門国、現在の山口県下関市、関門海峡にある小島、船島で宮本武蔵と巖流佐々木小次郎が果たし合いをおこなった。小次郎は小倉から、武蔵は下関から船島に渡り、浜辺の決闘は武蔵の勝ちとなった。

※画像の浮世絵は、歌川国芳による「巖流島決闘の図」。

四月二十三日 寺田屋騒動 文久二(一八六二)年

四月の島津久光の上京で天下は騒然とする。久光には討幕の意図はなかったのだが、討幕挙兵だと勘違いして京都へ駆けのぼった諸国有志も多い。薩摩藩内部ではこの喰違がもとで、寺田屋事件という悲劇が起こった。

挙兵討幕をはかる薩摩藩士が京都伏見の寺田屋に集会。これを知った久光は、鎮圧のため派遣した藩士奈良原喜八郎らとの間で乱闘となり、同藩士有馬新七ら尊攘派を斬った。



(著者は広島市安佐地区の郷土史研究会「安佐通史会」の会長。旧暦の啓蒙や「旧暦カレンダー」の普及に尽力している。)

スケッチは私の「宝物」

マック☆ヤマザキ（山崎允）

当時の私は、大阪観光学校で教鞭を取っていて、海外旅行の添乗員（ツアーコンダクター）を養成するため、学生たちを引率してアメリカ西海岸のロスアンジェルスとサンフランシスコを訪れていました。そこでは、世界的に有名なテーマパーク、ディズニーランドとユニバーサルスタジオ・ハリウッドの見学が含まれていて、学生たちも嬉々として行動してくれました。その間、私は、学生たちの連絡場所として園内の特定の場所を定めて、スケッチしながら待機。今から思うと、5年間、5回のこの研修旅行で描いていたスケッチが、その後も私の趣味となりました。



に変身し、私にスケッチのチャンスを与えてくれた「エンジェル」です。日本出発まで学校における授業は、渡航に必要な旅券用に戸籍謄本か抄本を用意させる、旅券申請用紙に必要事項記入、代金を添えて申請、そして旅券が発給され取得する一連の手続きを経験させることでした。出発当日は、航空会社カウンターで旅

券、航空券を提示、スーツケースを計量して航空会社に預け、手荷物札の半片をもらって、到着するロスアンジェルス空港まで大切に保管させる。

出国審査（イミグレーション）、パスポートの顔写真と名前が審査官により確認されるので緊張する。学生らしく敬意をもって対応するよう指導した。初めてパスポートの査証欄に出国を証明する「ヴァリデーション（出国日、空港名の入ったスタンプ）」をもらい一息つく。そして、搭乗ゲートを通り、機内に入る。

自分の座席の確認、通常、添乗員は通路側の席（アイル・シート）を指定して機内でお客さんに対応するため動きやすいシートを確保することが大切。CA（キャビン・アテンダント）に自分はグループの責任者であることを告げ、何かあれば連絡してもらおうよう挨拶をすることも付け加えた。

離陸後、水平飛行に移ると、CAさんたちが忙しくなる。食前の冷たい飲み物、の次は温かい飲み物（コーヒーか紅茶が）が配られる。大切なこと!! この時間に必ずトイレをすませておく。何故なら、食後は乗客が殺到するからだ。他の乗客に混ざっ

て列を作り、突然乱気流で席に戻らされるようなことになる。そして、機内の明かりが消され、お休みタイム。これらの手順を知っていると、自分も恥をかかないでいいし、お客様にも感謝されることになる。

着陸する2時間前、暗かった機内に突然明かりが灯され「オハヨーゴザイマス！ユックリオヤスミニナレマシタデシヨウカ？」のアナウンス。無理やり起こされて朝食。1時間後には食器類が片づけられ、着陸態勢に入る。もうトイレに行くチャンスはないのだ。

寝不足、時差ボケで入国審査。添乗員はグループの先頭に立って審査官に、学生全員の人数、観光の目的、滞在日数を伝え、入国の許可のヴァリデーションをパスポートに押ししてもらおうよう先陣を切る。次は手荷物検査場に移り、自分のバゲッジ（スーツケース）を引き取らせて確認する。もし紛失していたりすると持ち主と一緒に航空会社職員に紛失届を出して後続便で届けてもらうよう手配をしなければならぬ。ここまでの一連の手続きを英語でできるよう自覚させることも大切なのです。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

歌ふなら「同期の桜」春愁ひ

近藤 昌平

登る坂くだる坂ありぬめぐり

富久光

啓蟄や地震の片付けボランティア

片岡 正人

南天の実を喰い尽し鳥還る

隆愚

雛飾りいやにはしやげる三男坊

大槇 三代子

吹奏のひびき残るや春の暮

寺内 龍二

見上げれば深き空あり桜咲く

赤川 冬人

梅咲きてさくら花咲くこの春に

松岡 初枝

笑顔も咲けよ能登の人らに

投稿&寄稿

候のことば

隆愚

「初がつお」

旬は年二回。初がつおの春と、戻りがつおの秋。春は脂が少なくさっぱりとした味で、たたきが一番。秋は脂があるので刺身に適。縄文時代

には硬く干したものが貴重な調味料でした。江戸っ子の好物で、あぶりや湯通しにしたものを刺身として食べたそうです。 かつおのたたき。かつおに金串を打ち、皮に塩をふって、皮目を強火であぶって、身のほうはサツとあぶって、金串を抜いたら、刺身状に切ります。柚子にしょうゆ、しょう

が、にんにくを合わせたものをかけ、ねぎをちらしてトントンと叩いたら出来上がり。

目に青葉山郭公(やまほととぎす) はつ鯉 山口素堂

「井の中の蛙」かわず

赤川 仁洋

「井の中の蛙大海を知らず」という諺(ことわざ)がある。原文は中国の古典「莊子」の「井蛙不可以語於海者、拘於虚也」。井蛙(せいあ)には以(も)て海を語るべからざるは、虚に拘(かかわ)ればなり。訳すと、「井戸の中の蛙と海のことを語ることができないのは、蛙が虚(くぼみ)にとらわれているからである」となる。

老境に入って、自分は井蛙(せいあ)だとしみじみ自覚する。好きだった旅行も、あまり遠くに行くことはなくなつた。そういえば、海外旅行の経験は一度もない。古本の棚に囲まれて日々を過ごしている。自分が望んだことであり、それが楽しいのである。

最近になって、井蛙の諺に続きがあることを知った。「井の中の蛙大海を知らず、されど空の深さ(青き)を知る」。この「されど」の部分

は中国の古典にはなく、日本で付け加えられたオリジナルだという。さすがに「古池や蛙飛び込む水の音」(松尾芭蕉)という繊細な感性を、俳句という芸術に昇華させた国である。大海のことは知らないが、毎日見上げている空のことは誰よりもよく知っている。換言すれば、狭くても一つのことには精進すれば、その道のエキスパートになれる……。

書籍という知識の大海に溺れそうになりながらも、その深さを体感している毎日なのである。ものは言いよう(苦笑)。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

● **一 硬式テニス参加者募集 一**
 MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
 場所：三次運動公園の屋内&屋外コート
 ・火曜日 (9:30 ~ 12:00)
 ・水曜日 (9:30 ~ 12:00)
 ・土曜日 (10:00 ~ 12:00)
 ● 連絡先：中川 (☎070-8991-1682)



● 《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
- 教室&講座案内
- イベント情報
- あなたの大切な本の紹介
- ボランティア・ライター(現地記者)募集!

※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

● **どらくろあ**
 ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



● <http://shobara.wix.com/dorakuroa>

さげくらべて
なんじゃろ?

庄原酒販 利き酒・試飲イベント

IZANOMI SHOBARA-CITY SAKE MARCHE

4.6 土曜日 朝10時より昼15時まで

4.9 火曜日 朝9時より

お酒のお話
し・ま・せ・ん・か?

comeme 市場

場所・お問い合わせ
庄原酒販有限会社
庄原市中本町1-8-1
☎(0824)72-2183




「ぐんぐん伸びよう会」 (教室：庄原市川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

● **黒板のない教室**

● **自学自習力を育てる (2)**

小学生、中学生の間に、いつも大人に頼って勉強するのではなく、つらいこと
もあるけど自分自身の頭を使って、例題をしっかりと読み取り(理解し)、問題
を解いていくことを継続していくことこそ、学力の向上のみならず、生きる上で欠
かすことのできない根気、忍耐力を身に付けることができると考えます。

● 無料体験学習受付中!! お気軽に問い合わせてくださいね。 ● 対象者:0歳~小学6年生



旧米沢高等工業学校本館

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン:ROUTE183
協賛:九日市愛好会

◇音谷健郎さんの『文学探訪、「庄原」と百三の青春』の小冊子、完成までもう少しお待ちください。

◇今月号よりマック☆山崎さんの「海外添乗員日誌」がスタート。海外旅行の「裏話」が楽しみです。

◇水原通訳違法賭博事件で水を差されましたが、球春到来。カープは、今年も前評判が悪いですね。結果で見返しを！新サッカースタジアムにも行ってみたいです。

編集後記

◇桜の開花のニュースも聞こえてきました。が、県北はまだ先のようです。5月号では、木次線の桜巡りの写真&記事を載せたいと思っっているのですが、取材のタイミングが難しいですね。

第271回

くんちいち

しょうばら九日市

出店予定一覧 (順不同)

- ・文屋
- ・郷屋
- ・ぬくもり
- ・ちくちくはうす玉手箱
- ・お福
- ・工房アム
- ・農楽会
- ・二八そば加工所
- ・とらぢ
- ・さだっさ

- ・健康企画グループ
- ・里山キッチンほっぺ
- ・久代水産
- ・くんえん工房 香豚
- ・克国水産
- ・田崎屋
- ・宮川屋
- ・和み屋
- ・どんぐりーず
- ・クラフトショップ

- ・くららおばさん
- ・てしごと比和
- ・アーミッシュ
- ・満じいの手打ち蕎麦
- ・柳家
- ・かぐや姫
- ・ふくふく牧場
- ・佐藤園芸
- ・鮎屋
- ・健康企画グループ
- ・TSUDA



◇着物レンタル (着付けあり)

場所: 楽笑座 時間: 9時~12時

レンタル料: 500円

※和装で九日市散歩を!

4月9日(火)

9:00~13:00



TOPICS

- ★着物で来場、先着 5 名クラフトバスケット進呈!
- ★市民ギャラリー「アート多愛夢」
4月8日(月)~10日(水) 10時~15時
きよちゃんかずちゃん合わせて 180歳の作品展
- ★利き酒・試飲イベント「さけくらべ」(庄原酒販)
ガレージセール同時開催(場所:旧松本額縁店)
高野名物「アップルパイ」も販売します!
- ★HONMACH STAND→コーヒー100円引き
- ★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き
九日市特製ピタサンド600円
- ★どら書房、休憩室(漫画ルーム)あります!

*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円~
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 (楽笑座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

